

父幽谷に育まれた「若き日の東湖先生」

安 見 隆 雄

一 はじめに

水戸学講座も第十五回を迎え、今年は、『藤田東湖先生に学ぶもの』という総題により五回にわたって開講することになりました。

本日は第一回で、父幽谷に育まれた「若き日の東湖先生」についてお話を申し上げます。

さて、私ども講師はいずれも教職にありまして日々生徒の指導に当たっております関係から、当然教育問題については強い関心と危機感を抱いております。

ご承知のとおり、ここ数年来、教育改革が叫ばれ、文部省を中心として中央教育審議会や教育課程審議会あるいは教員養成審議会など日に夜を次いで審議が行われ、相次いで報告や答申を提出しているところでもあります。今度の小淵内閣の文部大臣になりました有馬朗人氏は長いことこの中教審の会長をしており、参議院選挙に立候補するために辞任し当選した人であります。

この中央教育審議会いわゆる中教審が、今年(平成十年)三月三十一日に「幼児期からの心の教育について」の中間報告を文部大臣に提出しました。

第一章は「未来に向けてもう一度我々の足元を見直そう」と、いくつかの提案をしています。以下、主なものをご紹介します。

1、「生きる力」を身につけ新しい時代を切り拓く積極的な心を育てよう。そのために、我が国の文化や伝統、誠実さや勤勉さ、「和の精神」、自然を畏敬する心、宗教的情操などを誇りとしながら、新しい時代を切り拓いていく日本人を育てていかなければならない。

2、正義感・倫理観や思いやりの心など豊かな人間性をはぐくもう、として、美しいものや自然に感動する心などの柔らかな感性、正義感や公正さを重んじる心、生命を大切にし、人権を尊重する心などの基本的な倫理観、他人を思いやる心や社会貢献の精神、自立心、自己抑制力、責任感、他者との共生や異質なものへの寛容、などの心が「生きる力」の核となるものであるとされています。

第二章では「もう一度家庭を見直そう」として、思いやりのある明るい円満な家庭をつくるう、会話を増やし、家庭の絆を深めようと提言し、さらに父親の影響力を大切にしようなどとして、「父親の存在が希薄化し、子どもたちは、母親の顔色

を気にし、母親にとって「良い子」になろうとする傾向がある、友達のような父親像が拡がる中、善悪のルールなどに関するしつけがおろそかになってきた、としております。

これについて、私が感じておりますことをいくつか申し上げたいと思います。先ず第一章では、子どもに生きる力をつけるために必要な項目を挙げていますが、抽象的な徳目とか事項であって、具体的な人間像が浮かんでこないことであります。

元東京大学教授（現、明星大学教授）小堀桂一郎氏は「理想像の復権」という昭和六十年八月に水戸市で開催された日本教師会教育研究全国大会における記念講演（「茨城県教師会叢書第六輯」所収）の中で、「私達が抱く理想、今は抽象的な理念でなくて、理想の人間像として適切なものは、やはり過去の歴史上に現実に存在してをりました個々の具体的な人間であるといふことになるでせう。つまり歴史上の志士、仁人、英雄、君子、もしくは女性であります。貞婦とか節婦などと言はれてをります、さういった、空想ではない現実の生身の人間であるが故に、我々が努力してそれに近づいて行くことも可能であるやうな、さういふ理想の人間像が、歴史から提供されるであらうと期待されるのであります。」と述べておられます。

現在、全国高等学校長協会では夫々の部会で検討を重ねて、中教審などへの提言を行っておりますが、その中で歴史や先哲に学ぶという視点が大切であることを述べております。

今日、歴史教室や郷土史講座という事業が盛んでありますが、学校の教育も含めて、この「先哲に学ぶ」という視点を忘れてはならないと思います。

第二章については、特に家庭や親子の関係が問題になっております。いかなる家庭が理想なのか、どのような親子関係が望ましいのか、今回の水戸学講座の中で、それらを併せて考えて参りたいと思います。

さて、東湖先生に関する講座の開講に当たって水戸市東湖会について触れておきたいと思えます。東湖会は昭和二十九年五月十五日、東湖先生歿後百周年記念事業を期して結成されました。常磐墓地で墓前祭を執り行った後、弘道館で記念講演が開催されました。私が水戸一高に入学する前の年でありましたが、先輩達の中にはこの講演を聞かれ非常に感動しましたと、時々話に上ることがあります。

講演録によりますと、初めに深作安文先生が「東湖先生と東湖会」と題して講演され、東湖先生は第一に卓抜な経世家であること、第二に清貧に甘んぜられたこと、第三に純日本学の学者であったこと、第四に有能な教育家であったこと、第五に逞しい文豪であったことをあげられて話されました。

続いて演壇に立たれた平泉澄先生は、初めに東湖先生の時代の情勢と今日（昭和

二十九年)の国際情勢が非常に似ていることを指摘されました。当時は北からロシア、南からイギリス、東からはアメリカがアジアに迫り来たり、極東の侵略を目指していたこと、現在は大東亜戦争に敗れ、ロシアは樺太・千島を奪い満州を取り、朝鮮の半分を取り、支那四百余州はその勢力下にあり、アメリカは沖縄を取り、太平洋の諸島を取り、日本の領土を七・八年に亘る占領政策をもって完全に圧倒し、イギリスは直接占領はしないが、日本の経済界の活路である南洋はイギリスによって完全に遮断されていることを説かれた後、ここに東湖先生の時代と何といふ驚くべき類似があるか、ほとんど同じ情勢にあるのであると指摘されております。そしてこの難局を打開するために日本はどうしたら良いかを指摘されたのが東湖先生であり、先生は安政二年に亡くなりましたので明治維新に直接貢献することはできなかったが、明治維新の大業を誘導されたのは実に東湖先生と言ってよいのであり、幕末数多くの英傑を見ると、殆ど全部が東湖先生の教えによって眼を開いた人物であるとして、橋本景岳、西郷隆盛、吉田松陰、真木和泉などの諸先哲について話されます。

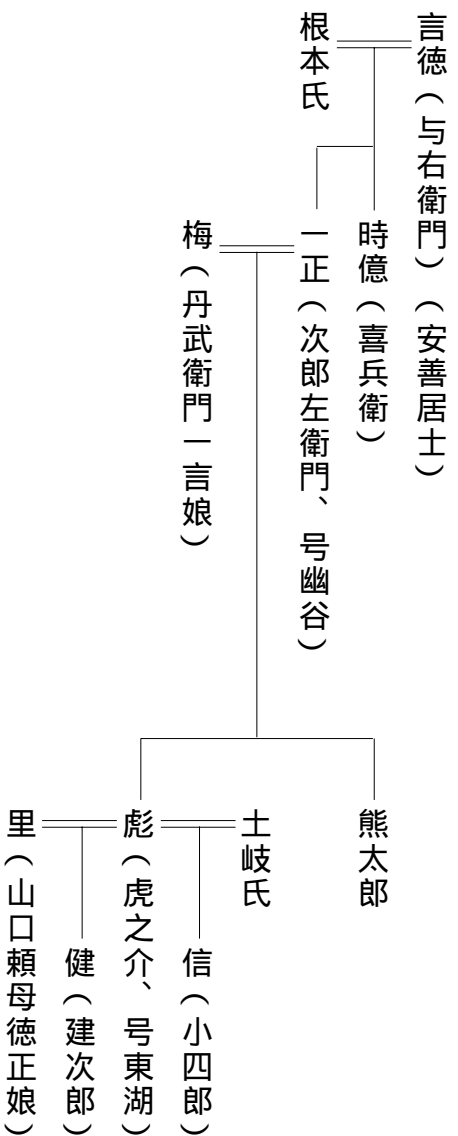
さらに日米開戦がハル・ノートの提出に始まり、我が国は見事に戦ったこと、目ざましい戦いであったことを熱く語り、最後に東湖先生の「桑原毅卿の京師にゆくを送るの序」をもって、国体名分を説き、弘道館記の教えを拠り所とすべきであると話を終わられ、聴衆は非常な感動を覚えたとのことでありました。

東湖会はその後、何年かは活動が続いたようでありましたが、諸般の事情により今日では実質的な活動は見られなくなっております。いずれにせよ、水戸では戦後間もなく東湖先生を敬慕しようという運動が起こり、東湖先生の力によって国家の命運を支え、道徳の高揚を図ろうとしたのであります。

次ページにつづく

二 藤田家と幽谷先生

藤田家の家系については、次の系図をご覧ください。



東湖先生は「青山雲龍先生に与ふる書」の中で、自分の先祖を遡れば小野篁たかむらではなかるうかと書いています。その中で小野篁は父に従って奥州へ赴き、馬術に熱中して学業を怠っていたが、時の弘仁天皇がそれを嘆かれたのを聞いて慙愧し、始めて学問に志したという、そのことを聞いた自分も翻然として志を立て、夙夜おこたらず読書講学に励んだと言うことを述べております。時に東湖先生二十一歳でありました。

東湖先生の祖父は言徳といい、古着を商い、藤田屋と号しておりました。次男が父幽谷先生で、幽谷先生の次男が東湖先生であります。

1 「正名論」について

幽谷先生は天性に恵まれ八・九歳ころから医師鈴木玄栄、寺社方の小川勘介について学問を始め、十歳ころから立原翠軒に入門し、学問に精進して行きました。

十五歳で栗山潜鋒の『保建大記』を読んで感奮したとありますが、その後の研究によりますと、すでに十三歳の時に『保建大記』を写しておりますので、我が国の歴史に目覚め、国体の本質について考えるようになり、真に学問に志を立てたのは、この頃であつたと思われます。栗山潜鋒先生は義公時代の大日本史編纂に従事した史臣の中でも傑出した人物の一人で、その主著が『保建大記』であり、北畠親房公の『神皇正統記』と比肩される重要な書物であります。

その学問の影響が先ずあらわれたのが、十八歳の時、時の老中松平定信の求めに応じて書いた「正名論」であります。

次の資料「先考次郎左衛門藤田君行状」をご覧ください。正名論の執筆と事情につ

いて書いてあります。

苟も廩仕を獲んと欲せば「厚禄をもつてつかえること」、幕府に事へるに若くはなし、今、白河侯「松平定信」新たに政を江戸に為す、務めて人材を抜擢す、而して子の文を求む、千載一遇の時、失すべからざるなりと。君「幽谷」、笑ひて答へず、迺ち正名論を著し、君臣の大義を述べ、以て之れに応ず。白河侯、蓋しもと君を聘する意有り、正名論の出ずるに及んで、事遂に寢む。(原漢文)

老中松平信定は幽谷の英才の誉れを聞き、一度その文を見たいと考え、その結果によつては幕府に登用しようとの意図があつたが、「正名論」を見て、幕府に相応しい人物でないと判断し、遂に登用の話は沙汰止みとなつたのであります。これについては、次の資料『保建大記』と「正名論」をご覧下さい。それぞれの一文を対比しておきましたが、その文体といい、その格調といい、その精神において共通するところが多く見られるのではないかと思ひます。

『保建大記』の藤原信頼の条に

臣愿曰く、甚だしいかな、世に姦多くして、人に術多きこと。一邪の起こるや、衆狡之に乗じ、彼の顕然の邪を売りて、以て我が隠然の姦を成さんと欲す。蓋し、一邪の欲は厭くこと有るも、衆狡の禍は測られず。信頼は一庸人なるのみ。

とあります。次に「正名論」の冒頭の文に

甚だしいかな、名分の天下国家において、正しく且つ厳ならざるべからざるや。それなほ天地の易ふべからざるがごときか。天地ありて、然る後に君臣あり。君臣ありて、然る後に上下あり。上下ありて。然る後に礼儀措くところあり。苟しくも君臣の名、正しからずして、上下の分、厳ならざれば、すなはち尊卑は位を易へ、貴賤は所を失ひ、強は弱を凌ぎ、衆は暴して、亡ぶること日なけん。故に孔子曰く「必ずや名を正さんか。名正しからざれば、」云々

この「正名」という言葉は論語に基づいております。その子路編に

子路曰く、衛、君子を待ちて政を為さば、子將になにをか先にせんか。子曰く、必ずや名を正さんか。・名正しからざれば、則ち言順ならず、言順ならざれば、則ち事成らず、事成らざれば則ち礼樂興らず、礼樂興らざれば、則ち刑罰あたらず刑罰あたらずれば、則ち民手足をおくところなし、故に君子これを名づくれば、必ず言ふべきなり。これを言へば必ず行ふべきなり。君子、其の言に於て苟もする所なきのみと

とあります。

これは老中松平定信が幽谷先生を幕府に招聘せんとするならば、先生は何を先にするとおぼやか、という問いに仮定し、幽谷先生は自ら孔子に託して「正名」を以て応えたものと思われます。

すなわち幽谷先生は、先ず天皇と將軍の関係、則ち名を正そうとされたものであります。將軍は天皇から征夷大將軍に任命されたものであり、従つて將軍は天皇に對して忠誠を誓い誠意を持つて命に従うべきであるとしたのであります。

一説にはこれは幽谷先生の幕府批判であり、やがて倒幕思想に發展したものとされてはいますが、私は根底には尊皇敬幕思想にあると理解してあります。ここに幽谷の名分思想の原点があり、やがて門人によつて發展敷衍され、水戸学を中心とする思想を形成していったのであります。

2 青藍舎の教育

幽谷先生が水戸城下梅香の自宅に家塾青藍舎を開いたのは、享和二年（一八〇二）二十九歳の時でありました。塾名の由来は、「青は藍より出でて藍よりも青し」という言葉に基づいた「出藍の誉」を意味するものであります。自分の塾から、師を越える優れた人物が輩出することを期待した命名であり、事実、その門下から会沢正志斎、豊田天功そして東湖先生など多数の逸材を生んだのであります。

幽谷先生の教育方針は『孝経』や『論語』を重視いたしましたして、君臣の名分や成徳達材の実践を重んじる実学を説き、国家有為の人材を育成することに努力しました。幽谷先生の没後は東湖先生が塾を受け継ぎました。

後年（嘉永元年）、東湖先生四十三歳の時、『孝経』・『論語』の輪講を再興することについて茅根伊予之介に与えた書翰のなかで

拜啓、愈御安健賀し奉り候、陳れば弊廬（自宅）会読二十三年中絶の処、来る二十五日より再興致し候、俊秀の子弟御率ひ、御賁臨（出席）下され候はゞ、大慶此の事に御座候、始めを尊び本に報ひるの趣意にて、孝経・論語二書より相ひ始め申し候、尤も論語は一・二巻づゝ輪講の積もりに候間、御率に相ひなり候子弟は、論語学而・為政二篇も下見御命下され候、下見之れ無きとて、断り候向きは、御率御無用に下さるべく候、刻限は正午揃ひに御座候（以下略）と述べ、出席する者は必ず下見（予習）をしてくるように指示してあります。

これは長州の吉田松陰先生の松下村塾に対比できるものであり、また、教育の原点がここに在るようにも思われます。

三 東湖先生の誕生と修学時代

1 父の養育

東湖先生は文化三年（一八〇六）三月十六日に水戸城下梅香の屋敷に誕生しました。髪黒く、顔は赤くつやがあり、大きな声で泣き、乳をよく飲む元気な赤子であつたといえます。初め武二郎と命名され、後に虎之介と改め、名は彪（たけき）、字を斌卿（ひんけい）、東湖という号は生家の東側に千波湖が望まれたことから選んだものであります。

六歳の時、父から『孝経』を教えられました。文章の読み方などは、堀川潜蔵について学んだのであります。

「東湖随筆」の巻頭に堀川潜蔵のことを記しております。それによりますと「堀川潜蔵は那珂湊の人で漁師や塩焼きの間に生まれたが、早くから読書を好み、親に仕えては純孝であつた。かつて父が死んで、親戚の者たちが火葬にしようとした時、潜蔵は頑としてそれを聞き入れず、遂に礼に従つて葬儀を行った。その後、斉昭公が藩主になると天保元年に火葬を厳禁された。潜蔵とは名で字は文淵といい、自分の亡父に学んだものであり、家柄は極めて低かつたが斉昭公はその好學と篤行を賞して、特命により名字を名乗り帯刀を許され夫持を賜ることになった。現在は湊村の敬業館の主事である。」とあります。

潜蔵の孫に当たる北条辰彦の談として、潜蔵は立原翠軒の下僕となり、密かに勉學、後に認められて門人となつた。幽谷先生と親しく交誼があり、長子朝宗を幽谷先生に委ね、代わりに東湖先生を託されたものであると、話しております。

（西村文則『藤田東湖』）

東湖先生の「正氣歌」の序文によりますと、東湖先生が八・九歳の頃から、父幽谷先生から文天祥の「正氣歌」を教えられたことが述べてあります。幽谷先生はお酒を傾け、調子を取りながら朗誦し、正氣の天地に塞がる所以について情熱を吐露しながら語りかけ、最後には忠孝の道義を語つて締めくくられた。三十数年前のことであつたが、今でも一字も違わず覚えており父幽谷先生の様子は今でもハッキリと心に留まっていると述べております。

詳しい内容については、後日の講座でとりあげられると思ひますので、ここではこれだけにおきます。

2 江戸留學

「回天詩史」によりますと、東湖先生は十四歳の時、学友豊田天功と共に父に従つて江戸に行き、父幽谷の紹介により始めて亀田鵬齋や太田錦城などの學者に

会っております。

時期は少し前に遡りますが、老中松平定信は寛政の改革において、朱子学を正学と定め、その他の学派を異学として排斥しようとした。

古学を標榜した亀田鵬斎は江戸学界の五鬼の一人に数えられ寛政異学の禁のために弾圧を受けた一人であり、また太田錦城については、幽谷先生は「錦城先生大田才佐墓表」（文政八年）を書して

木鐸の智、首丘の仁、先生これを兼ね、・先生博学、百氏の書、読まざる所なし、尤も経術に長ず

と評しております。錦城は宋学を奉じながらも、自分の意に合わないものは悉く反駁して、みずから一家の学を建てたといわれています。

これによりまして幽谷先生の学識は江戸においても広く知られ、当時の第一級の学者との交わりがあつたことが知ることができます。また若き東湖先生は幸いにしてこれらの学者と交わりを得て、学ぶ所が多くあつたことと思われれます。

しかし、東湖先生は学問の世界よりも武芸の分野に興味を持たれ、特に神道無念流の岡田十松の撃剣館に通つて剣術の修行に打ち込んでおりました。

幽谷先生が東湖先生に剣術の修行を勧めたのは、外患のきたるべき時を予測してのことであり、また、豊田天功を同道させたのは、お互いに切磋琢磨に期待したからと思われれます。

岡田十松について、東湖先生は自ら書かれた「撃剣館岡田先生墓碑銘」のなかで、

先生の人となり、体格が大きく、容貌は雄偉で、その勇武は天性に根ざしたものであります。そして人に接する態度は温厚でつつしみがあつた。喜んで人の美を称したといひます。また、岡田先生は若い時から喫煙の度が過ぎていたことを師の戸賀崎翁に無用の物を喫することを注意されるや、きつぱりと喫煙を止めたという。また飲酒の禍いを戒められ、その後は酒は三杯を過ぎることは無かつたと言ひます。（原文は漢文）

と述べております。余談ではありますが、東湖先生は岡田先生の禁酒を高く評しながら、ご自分は酒を余り節制することがなかつたようであります。

宮本左一郎は岡田十松に学び、水戸藩に仕えて神道無念流を伝え、実戦的な試合剣術を広めた人物であります。岡田先生が翌年亡くなつたため、以後は宮本左一郎について学んでおります。東湖先生は剣術の他に、弓術や槍術の習練をしておりました。

東湖先生の詩に「貧甚だしく劔一把、書一筐を鬻（ひさ）ぎ戯れに作る」と題す

る次のようなものがあります。

撃剣十年、纒（わす）かに身を護る

読書萬巻、貧を医せず

もし書剣に言語を解するを教へなば

応さに詈（ののし）らん頑迂の旧主人

と

東湖先生の酒好きと貧しさは有名でありました。金があると殆どが飲み代になつたといわれるほどでした。この詩の趣意は自らの貧乏さを何ら苦にせず、むしろその中で楽しみを味わうゆとりを詩に託したものであります。が、「撃剣十年」・「読書萬巻」とありますように青年時代に剣術や学問に精進した様子を垣間見ることができます。

四 大津浜事件

文政七年（一八二四）五月二十八日、イギリスの捕鯨船が小舟二艘に分乗して十二人が常陸の北辺、大津浜に上陸するという事件がおこりました。時に東湖先生十九歳でした。

その頃になりますと、常陸沖に異国船が頻繁に出没するようになりましたが、あえて上陸することはありませんでした。

大津浜は水戸藩付家老中山備前守の知行地であつたので、中山氏の役人が現地に赴き異人を捕らえ、併せて水戸藩へ届け出ました。

水戸藩では目付近藤儀太夫など警備の人数を派遣し、取り調べの役目として会沢正志齋と飛田逸民の二人を派遣しました。

会沢先生らは二回に渡って取り調べを行いました。言葉が通じないため、手まねや地図をたよりの筆談によって行いました。

その結果、彼らはイギリスの捕鯨船であることが判明したが、さらにその真意を突き止めようとして取り調べを進め、遂に彼らの目的は「神州を服従せしめんと云の意なるべし、・・悪むべきの甚きなり」という結論に達したのであります。この時の調査は「暗夷問答」という書物にまとめられています。

これらの調査の経過に対して幽谷先生はどのように対応したのでありましようか。

六月六日に藩主斉脩（哀公）に上書を奉呈して、彼らは単に薪水が欲しくて上陸したのではなく、会沢らが取り調べた通り別の目的があると考えるべきであることを申し述べたのであります。しかし、藩主は、幕府の役人が到着してからの判断に従えということでありました。

やがて幕府の役人が現地に着して尋問が始まりましたが、上陸事件を重大なも

のと考えずに船員らを釈放することになりそうだと噂が伝わりますと、幽谷先生は非常な決意のもとに、わが子東湖先生を呼んで話をするのでありました。

(回天詩史による)

頻年、醜虜(異人)辺海を窺ひ、時には大砲を放ち、我が人民を驚かす。傲慢無礼、それ何とか謂はん。而るに世を挙げて姑息、無事を喜ぶ。吾れは恐る、その或いは放還の策に出で、以て一日の安を苟(かりそめ)にせんことを、果して然らば則ち堂々たる神州、一の具眼の人なきなり、吾れ甚だ愧づ。

と述べ、さらに東湖先生に命じて

汝、速やかに大津に赴き、ひそかに動静を伺ひ、若しその放還の議決を詳らかにせば、則ち直ちに夷人の舎に入り、臂力を掉(ふる)ひ、夷虜を塵(みなごろし)にし、然る後、従容として官に就いて裁を請へ、一時の権宜に出づと雖も、以て少しく神州の正気を伸ぶるに庶(ちか)からん。

と語り、さらに

吾れ不幸にして女子多し、唯だ汝一男あるのみ、汝にして死せば、則ち吾が祀(まつ)り絶えん、是れ吾と汝と命の窮まるの時なり、汝、顧慮する勿れと、彪(東湖)慨然として曰く、謹んで命を奉ずと、蓋し、義、色に見(あら)はる、先子(幽谷)泫然として曰く、真に吾が児なりと、

このように決心し、出立を前にして別れの杯を交わしている間に、幕府の役人は薪水食料を与えて釈放したとの連絡が入ったため、東湖先生の決死の大津行きは中止になったのであります。これが、回天詩史に「三度死を決して死して而も死せず」とある一回目の事件でありました。

会沢正志斎は翌文政八年にこの訊問の結果をもとにして、有名な『新論』を著し、我が国の本来の姿(国体)を明らかにし、世界の情勢や今後日本の進むべき道などを明快に説き明かして、幕末志士に非常な影響を与えたのであります。

東湖先生の海防についての基本的な態度は、幽谷先生の教えによるものであり、所謂「尊王攘夷」であります。東湖先生が詠まれた和歌の中に、それを見ることができます。

寄海述懐といへるを人のみせければとりもあへず

神風のいせの海辺に夷(えびす)らをあら濤(なみ)たゞし打沈めばや

風にあやまたれて、そのかみ御国に漂ひよりしといふなる俄羅斯(ロシ
ア)人の歸りてあらはせるなりとて、異邦の物学びする人の詞(こと

ば)にあらため物して遭厄日本紀事と号(なづ)ける書を見て
磯城島(しきしま)の直なる道を横かきの蟹は争(いか)でかふみもしるべき
八千矛の一筋ことにこゝだくの夷(えびす)の首(かうべ)貫てまし

嘉永六年仰せごとによりて海防のこといそしみつかうまつれりける頃
かきくらすあめりか人に天日(あまつひ)のかゞやく邦の手ぶりみせばや

五 父幽谷の遺訓

東湖先生の「先考次郎左衛門藤田君行状」の中に、父(幽谷)の在りし日の姿を
表わして

君、家を治むること厳正にして法度有り、祁寒酷暑と雖も、未だ嘗て其の箕踞
「両足を伸ばして座る」、爐を擁するを見ず、袒裼(たんせき)膚を露わすを
見ざるなり、財を用いるに節あり、敢えて妄りに費さず、人或いは其の吝(吝)
「惜しみする」を疑う、而して急に赴き難を救い窮孤(孤独の困窮者)を賑恤す
るの類に至りては、則ち殆ど筐笥を傾け、以て之に資すること、毫も悋色な
し、宗族の子弟を戒むるに、必ず妄語(でたらめ)すべからずを以てす、人と
交わりては、必ず久しくして之れを敬え、毎に国家の為に人材を養い、以て不
虞の用に供せんと欲す、故を以て郷里の子弟、小にして道に志し有る者、必ず
励ますに忠孝を以てす。

と述べて、父の家庭における姿、暑い時にも足を伸ばして休息したり、寒い時にも
火鉢を囲むようなことも無かったこと、常に儉約を心がけているが、人を救うとき
には、有り金を惜しまず援助したことなどを述べています。また、一族の子弟を教
える時には、嘘やでたらめなことを言うことを戒め、人と交わる時には良く見極め
てから交際をすること、必ず最後には忠孝の大切なことを教えておられたと述懐し
ております。

これらは父幽谷先生の日常の態度あると同時に子である東湖先生への人として在
るべき姿を示した教えでもあったわけであります。

続いて、文政九年、幽谷先生が江戸の任が終わって水戸へ帰るに当たり、東湖先
生に言われるには、

学問切磋の功有るや大なり、江戸は都会の地なり、汝よろしく留まりてもって業を
遂ぐべし、

とあり、「回天詩史」には、父の教えとして

文武の道は相待ちて用をなす、偏廢すべからず、汝、腐儒迂生の為に效ふ勿れ、武人劍客の流に混ざる勿れと。是に於て、慨然として憤を發し、居る所の舎に命じて不息と曰く。

と記しております。幽谷先生の遺教は、文武両道にあり、理屈をこねるだけの腐れ学者や腕自慢だけの武人劍客にならないよう厳に戒められました。

六 おわりに

東湖先生の若き日の学問と修練を中心に話を進めて参りました。後日、天下の東湖先生と称揚される基となったのは、父幽谷先生の導きがあったこと多大なものがありました。

今回は言わば、東湖先生を理解するための導入に当たるものであります。しかし、この時期の鍛練がありまして、後の偉大な活躍ができて来るのであります。

次回以降も引き続き、ご来場の上、聴講いただきますようお願い申し上げます。終わりとさせていただきます。ご静聴ありがとうございました。

(平成十年八月二日講座)

(県立水戸第一高等学校校長)